

満徳寺梅香忌

中泉代官 林鶴梁を偲んで

令和八年二月七日(土) ～ 八日(日)

午前十時～午後四時

〔会場〕 満徳寺会館

盆梅展

梅茶無料接待

・金森よし子／切り絵と写真

・竹山 美江／創作布絵 ・満徳寺仏華の会作品展

講談 神田 鯉 風

八日(日)午後一時半始 木戸銭／おひねり

〔共催〕 磐田市観光協会

〔後援〕 袋井市観光協会



〒443-8007 磐田市中泉一丁目四の七 満徳寺 TEL 三三-三三三五六

林 鶴梁(伊太郎)について

文化3年(1806)武蔵の国に生まれ、幕末から明治初めの儒学者。嘉永6年(1853)48歳の7月から安政5年(1858)迄の五年間、遠江国中泉6万石及び御預所を管理する中泉代官として活躍した。支配地が安政の大地震や天竜川大洪水にあった時も、自ら粥の炊き出しや見分調査に当たり、被災地の宿村には救済金、夫食米を手配した。地震後の社会不安の取締りや片付け等にも尽力した名代官である。また、大地震や河川の氾濫の災害の経験から、災害のみならず平常時にも備えて恵済倉を発案した。

甲府御典館学頭や寺社奉行留役を経て中泉に赴任した鶴梁は、その後紫橋代官、新御番役、和宮下向供奉公家衆馳走賄、御納戸頭、新撰組の前身である新徴組支配頭、昌平坂学問所頭取等幕府の重職を歴任した。

佐藤一斎、松崎慊堂、長野豊山(儒学)、渡辺畢山、箕作阮甫(洋学)、窪田清音(長沼流兵学)に師事。その卓越した学問と見識によって、水戸藩主・徳川斉昭、信州松代藩主・真田幸貫、福井藩主・松平慶永、佐賀藩主・鍋島直正、土浦藩主・土屋寅直といった幕末の名君と親交があった。川路聖謨、岩瀬忠震、大久保一翁、羽倉簡堂などの幕臣、佐久間象山、若山勿堂、岡本秋暉ら学者と深く親交、会沢正志斎、大久保要、橋本左内ら志士とも意見を交わしている。国学者・石川依平、画家・福田半香、三宅鴨溪、医師・渡辺玄知、袋井宿の孤瑟と親しい間柄だった。漢文で著した鶴梁文鈔は夏目漱石、三田村鳶魚など明治時代のインテリ青年の愛読書として知られる。林鶴梁日記は、38歳から56歳までの19年の間に書き続けた日記で、当時の世相が解る書物として高い評価を受けている。

林 鶴梁(伊太郎)母堂について

中泉代官在任中に義母が亡くなり、満徳寺にその墓を建立した。「安政四年丁巳三月六日 当御陣屋中御代官林伊太郎の母七十八歳」と過去帳には記され、墓碑には證楽院殿釋光明徹照大姉とあり建立者は林伊太郎とある。翌年の安政5年に一周忌を勤めた事や、同年五月晦日、鶴梁は中泉を去るに当たってこの墓へ参り別れを告げている事が『林鶴梁日記』に記載されている。

熊本の藩学「時習館」訓導である儒者の月田蒙斎は、江戸で苦学生だった時に大変世話になり、「彼女は非常に風流で媛姿 文才に長ずるいっぽう 奇気あって武を講じ 兵を論ずる女丈夫であり 教誨厚く孟母の如き夫人であった」と義母を偲び、鶴梁に感謝の詩を贈っている。

『林鶴梁日記』について

左遷されて落ち込んだと思えば、榮転の知らせに喜び、愛妻を亡くした失意のどん底から一転、再婚相手探しに腐心するなど人間的な一面を持つ林鶴梁は、同時に赴任先にあっては真面目に公務を果たし、自然災害からの復旧に尽力する優秀な役人でもある。そして、漢学者・文人としての才能も併せ持つ彼の周囲には、自然と同好の士や世情を憂う仲間たちが集まり、好むと好まざるとにかかわらず時代の大波にもあそばれていく。動乱の幕末を、歴史の表舞台に立つことなく生き抜いた林鶴梁の日記からは、「篤姫」や「龍馬」ではけっして描かれることのない、もうひとつの「幕末」の姿が伝わってくる。

《徳川埋蔵金》

出身が赤城山に近いことで土地勘があったと推測され、また寒河江代官在任中に銅山での採掘に成功したことから、しばしば小栗忠順とともに「徳川埋蔵金実行役」としても登場する。